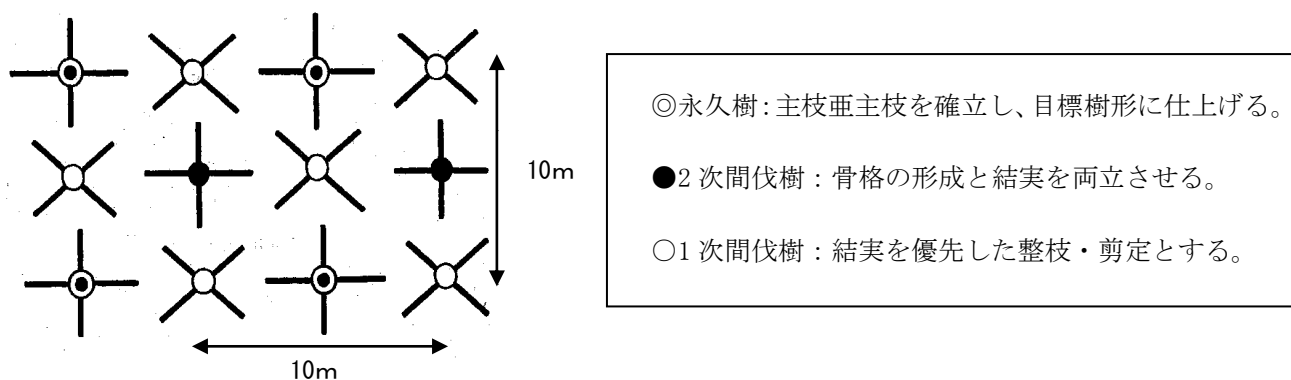


## 1. 南水整枝剪定のポイント

### ✿ 間伐・縮伐

5m×5m植え（又は4m×4m）では、8年目以降、主枝等の交差が多くなるので、縮伐・間伐を計画的に実施する必要がある。間伐が遅れると、混み合いから、主枝先端部分が弱り、樹冠拡大が遅れる。8年目を目安に1次間伐の縮伐を開始し、10～11年程度を目安に、1次間伐を終了させる。



上図：計画密植での主枝の配置

- ◇ 間伐にあたっては、遠い位置まで落ち着いた花芽をつけるために、骨格枝として亜主枝を育成することが必要となる。成木では、4本主枝を基本とし、各主枝に2本ずつ計8本の主枝を配置することが基本である。亜主枝の位置付けができていないか、主幹に対して太すぎる枝（特に樹冠内部）がないか、確認する。



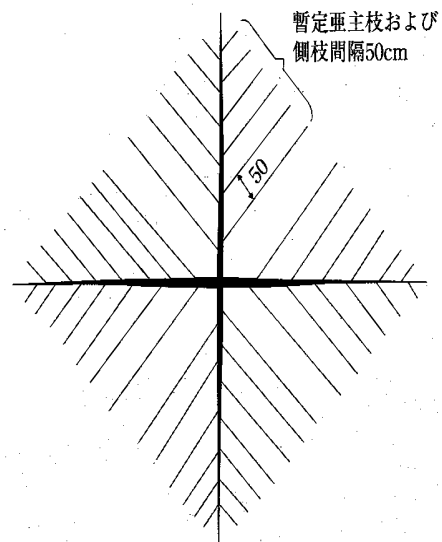
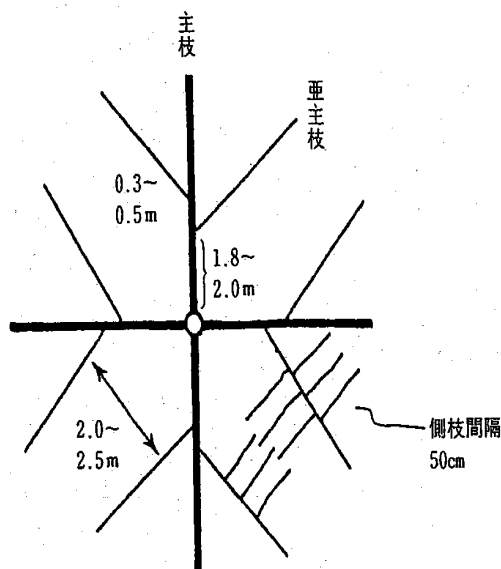
## ✿ 垂主枝の育成

① 現在発生している若い枝から良い位置のものを選び、養成する。

- 主幹部から 1.8m程度に第一垂主枝、その 50~60cm 先に第二垂主枝
- 垂主枝間隔は、2m以上空ける。

② 将来、側枝（結果枝）を多く配置するための枝である。側枝の候補となる横部からの新梢が発生しやすいよう誘導する。

- 枝の樹勢を強化する。 → 先端部を強化し、枝全体の着果負担も減らす。
- 切り口部分（潜芽の発生部分）を確保する。 → 短果枝群をある程度基部から整理（切除）する。



## 2. 側枝更新の目的

従来から高品質生産へ向けた重要なポイントとなっている事項が結果枝の定期更新（枝の若返り更新）である。しかし、実際は結果枝の更新が進まず果実品質低下（低糖度）が新たな課題となっている。そのため、側枝更新（枝の若返り）を計り高糖度・大玉・充実した花芽の確保など高品質生産を目的とし行う必要がある。

### ✿ 側枝更新のポイント

- ① 徒長枝はすべて切り落とすのではなく、主枝から斜め上向き又は横から発生した新梢を基本的には使用する。 ※真上に伸びている新梢は、強く・太くなりやすい。
- ② 候補枝の誘引は、約 45 度を目安とする。
- ③ 側枝間隔の基準は、30～40 cmに 1 本とする。
- ④ 側枝更新のタイミングは、概ね 5～6 年使用したところで候補枝を育成し次の年に切り替えを行う。



#### 枝更新（側枝更新）

今まで使用してきた枝を一気に切除し更新をしてしまうと生産量に影響が出てしまう。そのため、枝の更新は5～6年使用したところで、次の候補枝を準備し翌年に切除を行う。

### 3. 芽すぐり（花芽整理）の目的

結実が不安定な品種（品目）は、開花前までに有る程度芽すぐり（花芽整理）を実施しておく必要がある。そうすることで、開花時の受粉能力を最大限に高めることができる。

特に南水等は、結実が毎年不安定で、どうしても芽数を確保しておきたくところであるが、逆に芽数が多すぎると、開花時に貯蔵養分の競合がおき、結果として結実不良のなる場合が多い。芽数を思い切って制限することは勇気のいる作業であるが、花の能力を最大限に高め、結実安定を図るため、整枝剪定と並行して積極的に実施する。

#### ✿ 芽すぐり（花芽整理）のポイント

- ① **1短果枝当り1～2芽を残す**。主枝・亜主枝に片側15cm間隔で、横向きか斜め下向きの短果枝群を残し、上芽と下芽は基本的に切除する。
- ② ショウガ芽（短果枝群）を整理して貯蔵養分の消耗を防ぐ。通常はハサミで位置の悪い短果枝を中心に切除するが、葉枚数の確保を含めて、手で花芽を欠いてもよい。
- ③ 側枝の横向き（外側向き）の芽を2芽残す。上向きの短果枝は日焼け果になりやすいので切除すること。
- ④ 基の花芽に切り戻さず、果台を積み上げ、外に開いたように整理する（花芽の間隔が広くなり、受粉や袋掛けの作業が楽になる）
- ⑤ 横向き、斜め上向きなど欲しい方向（着果させたい方向）の花芽を残すことで、良質の花芽に養分を集中させ、幼果の肥大促進を図るために必要な管理。樹勢を保ち、肥大を促すことで、くぼみ果、条溝果の低減も期待できる。
- ⑥ 着果負担を減らして樹勢の維持、葉の増加も図ることができ、日焼けの防止にも役立てたい。



芽すぐりの例  
斜め横向きまたは斜め上の芽を残すこと。

